

平成 30 年 6 月 17 日現在

機関番号：23803

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26360017

研究課題名(和文) オーラルヒストリーによる戦後日韓関係の再照明

研究課題名(英文) Revisiting Japan-ROK relations after the war using the oral history method

研究代表者

小針 進 (Kohari, Susumu)

静岡県立大学・国際関係学部・教授

研究者番号：40295548

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は韓国人識者に対するオーラルヒストリーを通じて、戦後の日韓関係史を学際的に再構築していこうとするものである。戦後の日韓関係を知る識者が次々に一線を退いており、その証言を記録する必要がある。その証言からは、政府による公式発表や公文書だけではわからない両国間の歴史や政策決定の一端を明らかにすることができた。

戦後の日韓両国の政治家や知識人が、お互いをどう眺めあってきたがわかる語りも、多数得ることができた。

研究成果の概要(英文)： This research intends to carry out interdisciplinary reconstruction for the postwar history of Japan-Korea relations through the oral history to South Korean intellectuals. The intellectuals who know postwar Japan-Korea relations have retired a line one after another, and need to record the testimony. Their testimony taught us the history between the both countries which do not understand the official announcement or official document by the government, and a part of policy decision.

We were able to obtain many narratives to understand how politicians and intellectuals from both Japan and South Korea viewed each other after the war.

研究分野：地域研究

キーワード：オーラルヒストリー 日韓関係 対北朝鮮 福田赳夫 朴正熙

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究は、平成19年度まで実施した「口述記録と文書記録を基礎とした現代日韓関係史研究の再構築」(科学研究費補助金「基盤研究(C)」平成18~19年度、研究代表者：佐道明広、連携研究者：小針進)、「オーラルヒストリーを基礎とした日韓関係史の再構築に向けた学際的研究」(科学研究費補助金「基盤研究(B)(海外学術調査)」平成22~24年度、研究代表者：小針進、連携研究者：佐道明広、高安雄一、山地久美子、研究協力者：室岡鉄夫)を継承し、さらに発展させようとするものであった。同研究では、地域研究者(朝鮮半島)、日本政治外交(史)研究者、国際関係研究者を中心に、韓国の研究者の協力も得て、包括的な視点での資料収集を行い、近年ようやく方法論的に定着しつつあるオーラル・メソッドを用いて日韓関係に関する基礎的資料の収集を行うことを重要な課題としてきた。

(2) 上記2つのプロジェクトによって、金泳三元大統領、張聖萬元国会副議長、権五琦氏元副総理兼統一院長官・元東亜日報社長、崔相龍元駐日大使・高麗大学名誉教授のオーラルヒストリーを実施し、それぞれの記録を平成24年3月までに報告書として公刊した。

(3) 「オーラルヒストリーを基礎とした日韓関係史の再構築に向けた学際的研究」では、康仁徳・元韓国統一部長官、崔書勉・国際韓国研究院院長に対するオーラルヒストリー実施をそれぞれ同時並行で実施していたが、いずれも戦後日韓関係にかかわる重要な証言が多く、平成24年3月までに終えることはできず、研究継続の必要性が生じたこととなった。

2. 研究の目的

(1) 戦後まもなくの日韓関係を知る識者が次々に一線を退いており、鬼籍入りもしている。とくに1945年以前も知る「日本語世代」を中心とした韓国人識者の証言を記録する必要が急がれている。

(2) 本研究はオーラルヒストリー・メソッドを主に用いて、日韓関係を知る韓国の要人へ会議室等で数回に分けてロングインタビューを行って記録化し、現代日韓関係史を再照明し、学際的な検討を行うことを目的としている。

(3) 平成24年3月までに、上記1(2)で示した4人の要人へ、このメソッドを使った作業を行い、記録も残したが、このうち3人が、その後、亡くなられた。

(4) 証言を引き出すことを課題とするが、あわせて韓国人(とくに「日本語世代」)の

日本観をさぐる一端とした。日韓関係が日韓国交樹立(1965年)から50年を経たが政治・外交関係は、ときに葛藤局面を迎える。それでも、「書き言葉」として記録には残っていない日韓間の水面下の協力関係や深い結びつきがあったものが想像される。

(5) 日韓関係に関して、個々の断片的なものを除き、系統的に聞き取りを行うことによるオーラルヒストリーが実施されているわけではない。一般に、韓国人の日本に対する本音の「語り」は、建前の「書き言葉」とは大きく異なる。この点は、政府による公文書の調査だけでも不十分であり、オーラルヒストリーが果たす役割が大きい。

(6) 韓国の場合、大統領の持つ権限が大きく、大統領個人のリーダーシップの在り方が政策内容やその後の展開に大きく影響している。中心となる大統領やその周辺、および関連する日本側カウンターパートの反応も再照明する必要がある。歴代の大統領と接触してきた要人はとくに貴重である。

(7) 日韓両国の政治社会を比較する観点からも、両国の政治交流の動向を明らかにする必要性がある。この点は日韓両国の民主化の比較、政治文化の比較という点からも重要な課題である。

(8) ただ単にインタビューを行うのではなく、オーラルヒストリーを受けて、その精度の高い記録化を行った。記録化は段階的に行うが、最終的にその草稿を報告書として刊行すること自体も本研究の目的とした。

3. 研究の方法

(1) オーラル・メソッドは、原則として数カ月に1度のペースで行う研究方法である。対象者(話者)が韓国にいたため、研究グループと対象者の時間が合致する日程を1年に3回程度選んで韓国ソウルへ出張し、オーラルヒストリーを実施した。対象者が別の業務で訪日する場合、研究費の節約と効率につながるので、東京でもオーラルヒストリーを実施した。1日に行う時間は5時間程度であり、ソウルで行う場合は1度の出張で2日間連続、東京で行う場合は1度の出張で1日とした。

(2) 録音した音声記録は適正な保存をしながら、「録音起こし」を行った。質の高い「録音起こし」の作成は、技術的に高度であるだけでなく、守秘義務を厳守する信頼性の高い業者に第一段階として依頼した。「録音起こし」原稿は、草稿としてメンバーによるファクトと用語の最低限のチェックを行ったのち、話者からの校閲を受けるという記録化作業を行った。

(3) オーラル・メソッドの研究方法を用いて、康仁徳氏と崔書勉氏に対するオーラルヒストリーを、具体的には次のような日程で行った。康仁徳氏に対しては平成24年6月、平成25年8月、10月、平成26年6月、11月、平成27年8月に、崔書勉氏に対しては平成24年6月、12月、平成25年8月、平成26年3月、6月、10月、平成27年7月、12月、平成30年1月に実施した。

(4) 康仁徳氏と崔書勉氏に対するオーラルヒストリーにかかわる記録化作業は、平成24年6月から平成30年3月まで、同時並行で実施した。

4. 研究成果

(1) 崔書勉氏は1928年生まれである。本オーラルヒストリーでは、1957年へ亡命してから、1988年までの約30年間は東京に居住し、東京韓国研究院を自ら設立し、院長を務めた。その前の約30年、韓国で生まれ育った間には、社会運動(信託統治反対運動や戦災孤児院運営)やカトリックの活動にかかわった。李承晩の政敵である張勉に近かったことから、「亡命者」として日本の地に足を踏むことになった。本プロジェクトでは、日本による植民地時代や李承晩政権下の韓国での活動についても語ってもらったが、30年に及んだ東京での活動と生活に関しての語りが多くを占める。

(2) 崔書勉氏の経歴を整理したものは、これまでなかった。略歴は、次のようになる(オーラルヒストリーの主な対象とした1988年までの経歴に限定)。

- 1928年 江原道原州生まれ
- 1945年 大韓学生連盟(韓国独立党)委員長
信託統治反対運動で北へ行き曹晩植と面会
- 1946年 延禧専門学校修了
大東新聞記者
- 1947年 張徳秀事件に連座
- 1951年 戦災孤児院を運営
カトリック教総務院事務局長
- 1957年 日本へ亡命
- 1960年 亜細亜大学講師
- 1962年 「聖母おたあジュリアの殉教伝」を執筆
- 1966年 江原道開発公社を東京で設立
- 1969年 東京韓国研究院を設立し、院長に就任(理事長には木内信胤)
『安応七自伝』(『安重根獄中自伝』)を東京の古本屋で発見・発表
- 1971年 金玉均研究会を発足
- 1972年 『韓』を創刊
国際関係共同研究所を設立(所長に金山政英)
- 1973年 国際韓国研究機関協議会を設立し、

- 事務局長に就任
- シンポジウム「日本にとって韓国とはなにか」を東京で開催
- 1974年 シンポジウム「韓国にとって日本とはなにか」をソウルで開催
朴正熙と初めて会う
- 1975年 国際韓国研究機関協議会学術会議
および総会をソウルで開催
忠南大学校より文学博士号
ローマ教皇パウロ六世に特別謁見
- 1976年 安重根遺墨「國家安危勞心焦思」を譲り受け、韓国へ伝達
- 1978年 北関大捷碑を靖国神社で発見
- 1979年 安重根遺墨「為國献身軍人本分」を譲り受け、韓国へ伝達
- 1980年 安岡正篤から秋史金正喜の巻物
(「蘭」の絵と書)を譲り受け、韓国へ伝達
- 1983年 安重根研究会を発足
- 1981年 『混一疆理歴代国都之図』(朝鮮時代初の世界地図)を発見
- 1986年 交通事故に遭遇
- 1987年 「崔書勉君の滞日30年をお祝いする会」(発起人代表:木内信胤)が開催
- 1988年 韓国へ帰国。国際韓国研究院を設立し、院長に就任

(3) 崔書勉氏のオーラルヒストリーでは、具体的には、次のような証言を得ることができた(主なものを項目別に区分)。

a. 植民地期

- 終戦直前の延禧専門学校
- 神社参拝とカトリックと延世大学
- 植民地朝鮮を去る日本人教師への韓国人の思い
- 方子妃の事情
- ヒロシマで被爆死した李鍋公の事情
- 日本敗戦の8月15日と米軍進駐の9月5日の様子
- 日本軍の引き揚げと日本人街

b. 解放直後

- 李承晩政権下の韓国社会とカトリック
- 信託統治反対運動で会った曹晩植の様子
- 本人が連座した張徳秀暗殺事件
- 金九の指導下による平壤行き秘話
- 米軍政裁判の死刑判決と大邱刑務所
- 張勉から得た信頼
- 金大中をカトリックにした経緯
- 李姫鎬氏(のちの金大中夫人)の事情
- 解放直後の右翼と左翼
- 朝鮮戦争で人民軍に占領されたソウル
- 孤児院のソウルでの運営と釜山への避難
- 北朝鮮のカトリック事情
- 李承晩からの逮捕状で韓国脱出する経緯

c. 東京での研究活動

- 「東京韓国研究院」設立の経緯
- 入手した『安応七自伝』の本国への紹介
- 日本における安重根研究と金玉均研究
- 友邦協会と日韓親和会

- 「おたあジュリア」について
- 日韓会談での竹島をめぐる地図の話
- 安岡正篤から譲り受けた金正喜の絵と書
- 慶應と延世の姉妹関係締結にかかわる
- 雑誌『韓』の始まりと終わり
- 国会図書館と外交史料館
- 東洋文庫、学習院大学東洋研究所、京大
- 作家角田房子と『閔妃暗殺』
- 対馬の郷土史家との交流
- 「北関大捷碑」の発見と返還
- 広開土王碑と史料
- 在日文化人
- 広開土王碑の解釈をめぐって
- 『昭和天皇実録』にある「朝鮮人活動家」
- 韓国メディアの日本報道と日本メディア
- 高橋幸八郎と趙義高
- 国際関係共同研究所と『北朝鮮研究』
- 病みつきになったモンゴル紀行
- 韓国の日本に対する誤解を直す役割
- d. 保守政治家との交流
- 岸信介が築いた李承晩との出発点と朴正熙との間柄
- 福田赳夫とのエピソードの数々
- コリアハウスで作られた椎名裁定秘話
- 金大中事件とメディア
- 青嵐会、公明党、民社党と日韓議連
- 筑波大学の開校について
- 総理就任直前に三木武夫へ陸寅修と挨拶
- 待望の福田政権誕生
- ローマ教皇パウロ六世への特別謁見
- 「灘尾こそ朴正熙がいちばん気に入りそうな人」と藤田義郎
- 福田赳夫「竹島は日本領土だ」に反発がなかった当時の韓国
- 竹島では「同意できなかったことに同意する」という合意も
- 金炯旭事件があっても友好的な日本社会
- 福田政権下の「右傾化」
- 福田派と青嵐会の人々
- 親韓派の先代に抵抗しがちな二世議員
- らい病の治療薬を韓国へ送った土屋義彦
- 日韓の議員交流を成功させた要因は言葉
- 「断絶」回避の機能をする日韓・韓日議連
- お互いに礼儀を守った日韓の保守政治家
- e. 朴正熙との関係
- 朴正熙が永久執権を企図せず、金大中事件にも無関与だった秘話
- 福田周辺からの「金大中副大統領」構想を朴正熙へ伝える
- 「閣下」と呼ばず青瓦台をフリーパス
- 金大中に関して朴正熙と話したこと
- 日本財界との付き合いと浦項製鉄所秘話
- 民青学連事件をめぐって
- 文世光事件をめぐって
- 椎名裁定の三日前に三木の総理確定を朴正熙へ伝える
- 朴正熙の意向と福田の斡旋で中ソへ
- 人間朴正熙と日本を平気で褒めた言動
- 朴正熙の蓄膿症執刀医・足川力雄の秘話
- 大渡順二を通じて朴正熙の義母を神奈川

の名医へつなぐ

- 外国人指紋押捺と靖国神社参拝への姿勢
- 信じたくなかった朴正熙の殺害死
- 朴正熙国葬と直後の朴槿恵・金鍾泌
- 全斗煥政権下の韓国政府との絶縁

(4) 崔書勉氏に対するオーラルヒストリーで登場する、親交があった主な人物を整理すると次のようになる。

金九、曹晩植、張勉、崔圭夏、金大中、李姫鎬、鄭寅普、盧基南、朴正熙、朴槿恵、金相万、孔魯明、李方子、田中耕太郎、矢次一夫、岸信介、大平正芳、福田赳夫、安岡正篤、金山政英、金鍾泌、椎名悦三郎、藤田義郎、足川力雄、木内信胤、秦野章、長谷川峻、安藤豊禄、植村甲午郎、中川一郎、土屋義彦、大山倍達、浅原健三、角田房子、灘尾弘吉、坂田道太、唐島基智三、高橋幸八郎、神谷不二、衛藤藩吉、藤島泰輔（順不同）

(5) 康仁徳氏に対するオーラルヒストリーでは、解放前後の北朝鮮地域における社会状況（とくに教育）、朝鮮戦争前後の韓国社会の混乱（とくに思想動向）、韓国軍組織の状況、共産圏研究の起源、インテリジェンス面での日本との協力、4・19 学生革命と 5・16 軍事クーデータをとりまく軍の反応、中央情報部の創設、北朝鮮工作員への対応、朴正熙大統領の政策決定スタイル、南北共同声明の背景、北朝鮮の統一戦線をめぐる動向、朴正熙の死、新軍部、民主化への立場、民主化以降の対北朝鮮政策、金日成の死と金正日の登場、金大中政権下での統一部長官、北朝鮮の核開発などに対する証言が得られた。

(5) 両氏のオーラルヒストリーから共通してわかることは次の4点である。①戦後の日韓関係を知る韓国人識者から、政府による公式発表や公文書だけではわからない韓国側の証言を得ることができた、②東アジアの国際関係が日韓両国関係に与えた影響の一部を解明すると同時に、韓国政府の政策決定の一端を明らかにすることができた、③日韓両国の政治社会を比較する観点から、両国の政治家や知識人との結びつきは強いものであったことを明らかにすることができた、④韓国人（とくに「日本語世代」）の、日本や日本人についての話し言葉と書き言葉、私的言語と公的言語との間にズレも感じられ、日本に対する眺めにみられるアンビバラン的な性格の一端がわかった、⑤60年代から80年代にかけて日本の保守政治家が、韓国と韓国人を非常に重視してきたことがわかるが、これは対北朝鮮政策を含めた冷戦下という環境がそうさせてきた点を感じられる、⑥日韓間で外交問題が発生しても、日韓議員連盟等を通じて両国の政治家が困難を克服できた要素の一つとして、韓国側の政治家のほとんどが日本語が流暢であり、文化の基盤を共有していた点は否定できない、⑦朴正熙が自ら

の蓄膿症手術や義母の病気治癒のために日本の医療に頼るなど、70年代における韓国にとっての日本の重要性を思わせる状況が見いだせる、⑧日本の史料館、図書館、古書店の韓国にとっての重要性は小さくない

(6) 崔書勉氏のオーラルヒストリー記録の報告書(冊子=【写真】を参照)は主要大学・研究所・国や地方自治体の図書館・資料館、主要メディア、識者(研究者、政治家、文化人、ジャーナリスト)へ配布した。広範な研究者等が利用可能となることで、公共性の高い研究となった。他方、康仁徳氏に対するオーラルヒストリー記録は、編纂中である。



5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計12件)

- ① 小針進、「金泳三政権のW杯日韓共同開催誘致と韓国大統領の対日パーセプション」、『国際情勢』、第88号、2018、1-18
- ② 佐道明広、「日本の安全保障政策と台湾」、『中京法学』、第51号、2017、177-202
- ③ 小針進、「朴槿恵政権の対中政策と「位負け」外交」、『国際情勢』、第87号、2017、1-12
- ④ 高安雄一、「韓国における高齢化の帰結と課題ー経済学によるアプローチ」、『現代韓国朝鮮研究』第17号、2017、17-29
- ⑤ 小針進、「「朴槿恵スキャンダル」を生んだ韓国社会の背景ーパーソナリティ・制度・若者・メディア」、『アジア時報』、第522号、2017、6-13
- ⑥ 小針進、「韓国社会の核武装論をどう見るか」、『アジア時報』第514号、2016、4-13
- ⑦ 小針進、「日韓国交樹立50年目の構造変化と「眺め合い」」、『国際情勢』、第86号、2016、99-108
- ⑧ Kohari Susumu “Mutual Perception” between Japan and Korea during the Last Fifty Years : Journal of Contemporary Korean Studies Vol. 2, No. 2 2015, 53-84
- ⑨ 小針進、「抑制的反応をみせた韓国社会 :

その意外と必然(戦後70年談話を読む)」、『外交 = Diplomacy』、第33号、2015、116-122

- ⑩ 小針進、「朴槿恵政権の南北統一論議と韓国人の北朝鮮観」、『国際情勢』、第85号、2015、1-8
- ⑪ 小針進、「李元徳著『韓国外交と外交官ー呉在熙元駐日大使』」、『アジア研究』第61巻第1号、2015、81-85
- ⑫ 高安雄一、「経済学に依拠した朝鮮半島地域研究の展望ー韓国を中心に」、『現代韓国朝鮮研究』、第14号、2014、4-16

〔学会発表〕(計0件)

なし

〔図書〕(計 件)

- ① 小針進、有限会社橋本印刷所(科研費により冊子「報告書」を作成)、『崔書勉(国際韓国研究院院長)オーラルヒストリー記録』、2018、555
- ② 佐道明広、筑摩書房、『自衛隊史 防衛政策の70年』、2016、302
- ③ 高安雄一、東京大学出版会、「IMFによる金融支援の限界と日韓経済協力」、安倍誠・金都亨編『日韓関係史 1965-2015 II 経済』、2015、225-250
- ④ 佐道明広、吉川弘文館、『自衛隊史論一政・官・軍・民の60年』、2015、234
- ⑤ 小針進、藤原書店、『日韓関係の争点』(小倉紀蔵との共編著)、2014、341

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等
なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小針 進 (KOHARI SUSUMU)
静岡県立大学・国際関係学部・教授
研究者番号：40295548

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

佐道 明広 (SADO AKIHIRO)
中京大学・総合政策学部・教授
研究者番号：10303091

高安 雄一 (TAKAYASU YUICHI)
大東文化大学・経済学部・准教授
研究者番号：20463820

(4) 研究協力者

室岡 鉄夫 (MUROOKA TETSUO)
防衛省・防衛研究所・図書館長
研究者番号：なし